

## 色いろいろ

桑原 正紀

日本語の色彩を表す語は軽く千を超えるという。日常生活ではせいぜい十種類もあれば事足りるけれども、短歌の世界ではかなり高い頻度で特殊な色彩語が使われる。「浅葱」とか「縹」などは最たるものだろう。両者はすごく近い色なのだが、「浅葱（色）の空」と「縹（色）の空」の違いを説明できる人はどれくらいいるだろうか（実は私も言葉で明確に説明する自信がない）。「甕覗」などに至っては言うまでもない。しかしこれらは、ある種の雰囲気漂わせる色彩語としての効力はあるので、短歌の世界ではいまだに生きているのだろう。その他にもふだん馴染みのない色彩語はたくさん使われていて、辟易するときもあるが、色彩語には文字通り（色づけ）として作品をより豊かにする効力があることは確かだ。

初秋の青日溜まりをよこぎりて冠毛鳩の群移りゆく

大森悦子『青日溜まり』

この歌の「青日溜まり」は作者の造語のようだ。場所は

シドニーで、ユーカリの木の油が揮発するせいで光が青っぽいのだという。この色彩を含んだ造語が「冠毛鳩」と相俟って、異国のふしぎな光や風景へ想いが誘われる。

箆笥からあじさい色のはみ出して君のネクタイ旅に出たがる 前田康子『おかえり、いつてらっしやい』

桐の花いろの第一只見川橋梁わたる二輛のひかり

本田一弘「歌壇」(二〇二二年一月号)

一首目は「あじさい色」を主語にした珍しい歌。「ネクタイ」に置き換えたわけで、いわゆる換喩法という手法である。それが読者の意表をついて、いよいよこの「あじさい色」が印象的に脳裏に灼きつく歌になっている。

二首目の「桐の花いろ」は、妙に絞り込んだ表現なので気になって調べてみたら、この橋のある福島県三島町の土産が桐で、その花の色の薄紫に塗装してあるのだという。実直な本田さんらしく正しい表現だったわけで、これはこれで深く納得した。

マスクしてマスクはづして在る日々の白い春なり も

うはなみづき

小島ゆかり『雪麻呂』

明るくて清潔感のある「白」だが、これだけ日常生活につきまとうと不安を象徴する色となってしまう。

色彩語は短歌の中でたいせつな働きをする。それだけに常套的な使い方や雰囲気づくりだけではなく、ひと工夫加えた用い方が要求されるだろう。